サロンの文芸活動(Ⅵ)

―皇后定子サロンの系流―

目加田　さくを

(一)　敦康親王誦合長和四年四月

十世紀のサロン活動は、皇后定子の死をもって幕を閉ぢた。十一世紀のサロン活動は、皇后定子所生の敦康親王、修子内親王、その孫・嫄子女王（後朱雀中宮）、姪の子延子女御、曽孫祐子内親王、楙子内親王達のそれへと華やかな展開を遂げる。

敦康親王は一条帝の第一皇子。母は皇后定子、外祖父は中関白藤道隆。学才といい人物といい、当然、皇位を継ぐべき皇子であったが、左大臣道長の徹底的な策謀によって、弟の第二皇子敦成、第三皇子敦良に奪われ、不遇の中に世を去った経緯は、栄華物語、殊に大鏡が言を尽して縷々物語るところである。註(1)敦康親王に並々ならぬ好意を示したのは道長の長子頼通であった。彼は北方具平親王女隆姫の妹女王を敦康親王に納れる。註(2)

式部卿宮（敦康）も、同じき宮達と聞えさすれど、御心も御かたちもいみじうきよらに、御才なども深くて、やむごとなうめでたうおはしませば、御宿世の悪くおはしましけるを、世に口惜しき事に思へり。大殿（道長）の大将殿（頼通）、この宮の御事をいとふさはしき物に思ひきこえさせ給て、常に参り通はせ給ふと見し程に、大将殿の上の御おとうとの中宮に、この宮を婿取り奉らんとおぼし心ざしたりけるなり。さて婿取り奉らせ給ふ……（栄華物語巻十二たまのむらぎく）「式部卿宮うせ給ひぬ」とののしる……若くおはしっれど、御心のいとありがたくめでたくおはしつる有様に、かく上の御方のゆかりとはいひながらも、ゆゆしきまでおぼし扱はせ給ふにはなん（栄巻十四あさみどり）

註(1)たび〳〵（敦康親王）の御おもひたがひて、――世の中をおぼしなげきてうせたまひにき。御とし廿にて、あさましうてやませ給にしかは。冷泉院の宮達などのやうに軽軽におはしまさましかば、いとをしさもよろしくや、よの人もおもひまさまし。御ざえいとかしこう、御こゝろばへもいとめでたうぞおはしまし、……よの人は「宮（敦康）の御（即位）ことありてこの殿（隆家）御うしろみしたまはば、天下のまつりごとはしたゝまりなん」とぞおもひ申ためりしかどもこの入道殿の御さかへのわけらるまじかりけるにこそは。（大鏡道隆伝）

註(2)長和二年十二月十日帥宮（敦康親王）御方故中務卿宮（具平親王）女子参。其間雑事等仰置退去。入夜又参。亥時参入云々。西対北面為在所、其装束甚以過差、是大納言（頼通）所為也。同時著裳云々、時剋参入、従南陣有仰入車。件車我（道長）也。車副八人著冠等。女方入従北門、其後可然

雑事催行、相従参上公卿等八九人許、示置時能程女方可度給由等事。従宮御方、有宮御装束。従家可奉。今日不奉退出、仰置明日御使事、退出間有雨気、時々降（御堂関白記）以下御ト略ス

一〇一三　長和二年十二月十日（15才）具平親王女、敦康（帥宮）親王に参る。同時に着裳。（御）

一〇八四　三年十月十二日（16才）帥宮皇太后宮に参る。廿五日左府宇治第に向う。十一月九日女一品宮（修子）に参る。（小右記）

一〇一五　四年二月四日（17才）叔父隆円×四月八日大宰帥親王家有謌合・題云・花残春意駐（日本紀略）

四月廿一日　叔父大宰権帥隆家大宰府へ赴任、叙正二位。

一〇一六　五年七月十九日（18才）式部卿宮（敦康）（具平親王二女）内方有産事（御）　姸子女王出生

一〇一七　寛仁元年（19才）小一条院皇太子辞位　三條法皇×・

一〇一八　二年十二月十七日（20才）敦康親王×

敦康親王謌合は、親王17歳・新婚の夢まどかな晩春である。漢学の家流を承ける親王らしく、歌題は「花残春意駐」である。詩題風の歌題は男性の歌合によく見受られ孫の袿子歌合にも月光似水、夜霰寤夢・家梅始開……とあるが、五言の歌題は珍しい。親王にとっては、馴染み深い詩題が極く自然に歌題にも出たものであろう。残念なことに詠藻は残存しない。敦康親王の女姸子女王は、伯母夫妻頼通・隆姫の養女として愛育される。頼通は父の遺言に逆らって後朱雀帝の中宮に姸子を冊立した。道長は孫の禎子内親王の後見をしかと頼通に頼んで世を去ったが、頼通は姪の禎子を皇后に格上げし、養女姸子を中宮にした。註(3)姪であれ、親なしであれ、己が娘を後宮に納れて君寵を争わせ、男皇子出生を願うという、非常な手口は、実は御堂関白道長のお家芸であるから、頼通は父に倣ったにすぎないが。

註(3)年かはりぬれば内わたり華やかに今めかしう……七日、式部卿宮の姫君参り給ふ。殿（頼通）の居立ちせさせ給ふ事なれば、世の中靡きていとめでたし。内より御使……殿（隆姫）の上もおはします。弘徽殿・登花殿かけておはします。内はなほ梨壺におはしませば道いと遠し。一品宮宣耀殿（禎子）・麗景殿におはしませば、承香殿の馬道より通りて上らせ給ふ……（栄・巻三十四暮まつほし）

長暦元年二月十余日に一品宮（禎子）后に立たせ給ふ……三月に又式部卿宮の姫君（姸子）后に立たせ給ふ。一品宮（禎子）をば皇后宮、この宮（姸子）をば中宮と申す……（仝右）

(二)　中宮姸子サロン長暦二年

栄華物語には姸子中宮サロンの様相を、中宮には前裁合・菊合などせさせ給て、をかしき事多かり。甚だ盛大な催しであった。と記す。それは、春記によると関白頼通好み（栄三十四暮まつほし）

長暦二年十月十六日己卯天晴、今日於中宮可有進菊之興、是従先日被企事、其事師房卿・公成卿・経輔等発起云々、可入菊之器、皆可用金銀風流云々、親々上達部殿上人等之外不相示、称我黨云々事太訛也、又人々不請事也、予不入其中、又推獻菊花無由之内、金銀風流何為乎、仍雖所労非事称其由籠隠、而又如此之興宴、其作法非尋常、如田夫闘諍、知耻之人、交衆尤有憚了……

十七日庚申天晴、左衛門佐経季自内退出、来談云、昨夜依召参中宮、関白、東宮大夫、中宮大夫、東宮権大夫、権中納言、信家、四條中納言、依召参、但直衣云々、太無便事也　二位中将、左兵衛督、新宰相中将、新宰相等也、皆着直衣祇候、不御傍親之公卿・直衣候内之事、近代之作法也殿上人経輔、資通、経長、経季、師長、資綱・経成・経季等也、人々進一本菊等、其高或一丈餘云々、其入物各盡金銀風流、此中公成卿、経輔菊其入物太以美麗也、自餘人々不慥覚者、先有盃饌東片庇云々事畢被参御前座、即有管絃事、次和歌事云々・暁更講和歌畢、各々分散者、人々云・検非違使別当盡金銀風流之事・先例無此事・可弾指事也云々、資通、経長不進菊、凡不盡進云々、後聞菊二本被奉内御方、其一本被奉女院云々……（春記）

とあるから、華奢を極めた菊合に重点が置かれ、後宴で管絃があり、和歌を詠進したものの、歌合は催さなかったようである。前栽合も、瞿麦、女郎花等々物合に熱中し、華やかな物合せが屢々催されたであろうが、歌合は伴わなかったのではあるまいか。進菊之興の発起人は、源師房、藤公成、経輔という。師房は具平親王男、頼通北方の弟、頼通猶子。経輔は隆家の子、何れも嫄子ゆかりの人々である。風流を尽くした金銀の器に盛った菊を持ち寄った菊合の華麗さ、派手な騒ぎであったろう事は、「太訛也、如田夫闘諍」と参議資房の顰蹙ぶりで想像される。この華やかな嫄子サロンの賑いを、皇后禎子は寂しくきいていたと栄華物語は伝えている。

しかし、栄華も又、儚く終る。嫄子[註(4)]中宮は翌年崩御。24才。嫄子の遺児、祐子内親王3歳と出生したばかりの禖子親王は、又、頼通、隆姫夫妻に愛育されることとなる。

註(4)かくて中宮には又ただならずならせ給へれば世にめでたきことに聞えさす……（八扶桑略記・今鏡九月十九日・廿八日×）

九月に中宮この度も女宮生み奉らせ給て、九日といふにうせさせ給ひぬれば、あはれにいみじき事をおぼしめし歎かせ給ふ。姫宮[禖子]を殿の上御形見と撫でかしづき奉らせ給ふ。阿波の大進下らんとて、入道一品宮[修子]に参りたりけるに、かゝる御事にてとまりぬらんとて相模がおこせたりける。

時雨する秋のみ山の嵐にはよに大淀の船出せじかし

御四十九日に雨の降れば行親がもとに出羽

まして人いかなる事を思ふらん時雨だに知る今日のあはれを

また誰とか

霧はれぬ秋の宮人あはれいかに……

故中宮の出雲、下野がもとに

いかばかり……

などあはれなる事ともおほかり。はかなく月日もすぎて内の大殿の御匣殿しはすに参らせ給ふ。宮の御事の程なきになど、殿はおぼしめしたり…（頼通）

七月七日（長暦四年）故中宮[嫄子]の御事をおぼしめいでて若宮に去年の今日別れし星も逢ひぬめりためしなき身ぞ悲しかりける（なたぐひなき我身なるらん）

御返し

秋くれば流れまされど天の河影だに見えぬ人ぞ恋しき（栄・三十四春まつほし）後拾遺集・今鏡には関白頼通の歌となる

祐子内親王に宮仕した孝標女が、中宮亡き後の寂しい藤壺のくらしを綴った條、更級日記

又の夜も月のいとあかきに藤壺の東の戸をおしあけて、さべき人々物語しつゝ、月をながむるに、梅壺の女御（嬉子）のぼらせ給なるをとなひいみじく心にくく優なるにも、故宮のおはします世ならましかば、かやうにのぼらせ給はましなど人〳〵いひ出づる、げにいとあはれなりかし

あまの戸を雲居ながらもよそにみて昔のあとを恋ふる月かな

(三) 一品内親王修子サロン

修子は長徳二年出生、五歳の十二月、母皇后定子は、妹の媄子出産後他界。十二歳で一品に敍せられるなど、父一條帝に鍾愛され、一条院の別納に弟敦康親王と共に住んだが、寛弘八年六月16歳一条院の崩御に遭い、八月には叔父の中納言藤隆家邸に出る。長和二年、正月廿七日夜18歳父院の旧臣らを従え、金作の檳榔毛車（道長が奉った）に乗って雨中華やかに、三條宮に渡る。十二月弟敦康親王は頼通の世話で具平親王女と婚。翌年十一月弟敦康親王が訪れる。又その翌年四月八日敦康親王邸では謂合が催されたが、四月廿一日唯一の後見者である叔父帥中納言隆家が太宰へ赴任。「一品宮をよに心苦しう思ひきこえさせ給ひながら、かう遙におぼし立ちぬれば、宮いみじうあはれにおぼさるべし。源中納言（経房）（に）よろづ宮の御事聞こえつけて下り給ひぬ。あさましうあはれなる世の有様なりかし……」（栄・十二・たまのむらぎく）

21歳、弟敦康親王に姫子出生。23歳、寛仁二年十二月弟敦康親王（20歳）他界。25歳、寛仁四年十一月廿六日に姪姫子5歳の着袴が養父頼通によって行われると、翌日、修子は従姉妹（伊周大姫君）と通宗（頼通弟）との女で養女の延子7歳の著袴の式をあげる。彼女は、将来この延子（註(X)）の入内を考えていたという。

中姫君（延子）は前一品の宮（修子）に一所つれづれにておはしませば迎へ奉らせ給て、いみじくかしづき奉らせ給て、註(X)それも内にとおぼしめしたれど、内大臣殿（教通）の御事だにかく難ければ、いかでかおぼしよらん。一品宮は一条院の皇后宮の御腹におはしませば、内の御（後一条）いもうとにおはします……春宮大夫殿（頼宗）の上は帥殿の姫君にものし給へば、一品宮には離れさせ給はぬ御中にて、姫君をも御子にし奉り給へるなるべし。三条宮におはします。

(Y)御手めでたくかかせ給ふ。琴、琵琶弾く人人候ひて、いとをかしくひきあはせ遊ばせ給ふ。この姫君も箏の琴いとをかしく弾かせ給ふ、御かたちも、いとあてにをかしげにものし給ふ（栄・三十一 殿上の花見）

29歳、万寿元年出家。3才にして母后を、16歳で父帝を亡くした修子は、23歳に弟敦康親王をも失った。一層道心深くなっていった。17歳の長和元年に、すでに道長は修子に「奉二前日有レ召経一」っている。かねてより佛道に深く心をよせていたのである。

一条院の一品宮（修子）、年来（ねんらい）いみじう道心深くおはしまして、御才（ゐざえ）などはいみじかりし御筋にておはしませばにや、一切経読ませ給ひ、法文ども御覧じて、いささか女とも覚（おぼ）えさせ給はぬ御有様なるに、「尼にておはしまさんもかばかりの御行（おこなひ）にこそはあらめ」などおぼしながら、なほ「あひなき事なり。何事にさはるべきぞ」などおぼしめしけるにや、三月に俄にならせ給ひぬ。……さるはこの正月に大宮（彰子）の京極殿におはしましに行幸ありしに、宮（修子）もそこに渡らせ給て、御対面ありしに、いみじうあはれに

物をおぼし知る様の御物語などありて今よりは内におはしますべく聞えさせ給て年来のおぼつかなさを悔しう思ひきこえさせ給ふに、かかる御事をきこしめして、あはれに口惜しうおぼしめす。殿の御前いそぎ参らせ給て、よろづあはれなる事を（返す返す）聞こえさせ給ふ。「故院もかやうにてぞおはしまさんものとぞおぼしめしたりしかし。…女房達まめによくよく仕うまつり給へ」など　あはれにこまやかに聞えさせ給（て）いでさせ給ひぬ。帥中納言は、「とかく仰せらるとも制し申すべきにも侍らぬに、心憂くえ知り侍らで」と、いみじう泣き給ふ

（彰子）大宮よりも殿よりも御装束奉らせ給ふ

宮は春宮大夫殿の中姫君、まだをさなくおはせし折より、とりはなち養い奉らせ給ける程に、今年九つばかり（に）ぞならせ給ひにける。この度の御有様をいみじう口惜しう心細くおぼしめしたり。それにしたがひて大夫殿の歎かしうおぼすべし……一條院よろづにし奉らせ給へりし何の御調度ども皆この姫君の御料に取りをさめ給ふ（栄　二十一　後くゐる大将）

小右記（万寿元年三月四日）日本紀署（三月三日、今日一品修子内親王落飾為尼、早旦前帥示送云、一品宮廿余日有レ被レ悩、而去夕俄被二出家一、若是御本意歟、有二何事一

㊐学才で世間の評価の高かった中関白家流・学の家門高階家流の子女である為、修子も学才があり、かねがね一切経を読んでいた、法文に通じ、女ばなれした生活をしていたという。当時の貴婦人としては稀有な生活態度で、極く自然に出家の道に入って行った。叔父の隆家は泣き、道長や彰子も感動して、何くれと世話をやく。若い日の修子は、専ら道心深かった日常で、歌合などのサロン活動は、もっていなかったかと思う。有名なサロン活動をしていた大斎院選子が、長元八年他界、翌九年、弟の後一条帝29歳崩。修子40歳。弟後朱雀帝が即位し、翌長暦元年、姪嫄子入内。養父頼通の後援で華やかなサロン活動を展開する。しかし長暦三年八月、禖子出生後九日、中宮嫄子は24歳で他界。修子44歳であった。待ちかねていたかのように教通は十二月二十一日生子を入内させた。母、父、弟、姪と、打ちつづき近親の死に遭いつづけてきた修子は、立ち直りが早い。翌長暦（長久元）四年正月庚申の夜、修子は歌合を催す。この歌合の歌は、萩谷氏によって一首、夫木抄所収歌から発見された。外は未詳。

和歌合抄目録巻五

一条院入道一品宮歌合題古歌合長暦四年夫木抄

天暦四年庚申一品宮歌合　よみ人しらず

霞より立ちこそまされ久方の雲の上なる天の香具山

萩谷氏は、「題古歌合」を、「古歌の返し歌または本歌取りの歌として始めて理解せられるものではあるまいか。即ちこの歌の本歌となったものは、万葉集巻十雑歌人磨一八一二の「久方之天芳山此夕霞微春立下（ヒサカタノアマノカグヤマコノユウベカスミタナビクハルタツラシモ）」であり、その第一、二句と第四句とを取って構成したものと考えられるのである」（平安朝歌合大成三　830頁と想定される。漢文学に造詣深いといわれる修子は、万葉集にも馴染んでおり、自身も万葉歌を本歌とした歌を詠み、当然叔父隆家――（萩谷氏は、道済集の「蔵人に中納言の君の御もとにて歌合に・春待つ心」を『一〇七［長保三年］中納言［隆家］歌合』と想定する）――等が出席したのではあるまいか。翌長

久二年二月、弘微殿女御生子歌合が催される。

長久二年夏、修子歌合　46歳

この歌合も、萩谷氏が和歌合抄目録十番題五首に相当する作品五首を、千載集、万代集、夫木抄、古来風躰抄等から収集されたところ。それに従えば

歌題　菖蒲　花橘　時鳥　瞿麦　恋

日時　長久二年（夏）

歌人　批杷殿皇太后宮五節　小命婦　加賀左衛門　相模

であった事が明瞭となる。小命婦以外の三人は、五節は長元五年、彰子、菊合　長暦二年源師房歌合　長久二年四月仝上、加賀左衛門は長久二年四月源師房歌合、相模は長元八年五月関白頼通歌合　長久二年二月　弘微殿女御生子歌合等、諸歌合に出ており、其後も「入道一品宮の相模（栄華物語）として、倫子百和香歌合、延子、祐子、内裏、皇后寛子等の歌合で活躍する。加賀左衛門は彰子歌合の常連であり、太皇太后寛子寛治三年歌合迄活躍。これらのベテラン歌人女房就中相模あたりの肝いりで加賀、五節、小命婦が呼び集められて、入道一品宮の慰めにと催されたものではあるまいか。

相模（修子）、加賀左衛門（祺子）、五節・小命婦（彰子）らは凡て頼通文化圏で活躍した手練の歌人女房である。

敷島や玉江の沼の菖蒲草つらぬく千代の数とこそ見め

大和にも唐にも匂ふ花なれば垣穂のほかに照らすなでしこ

菖蒲の歌に祝、慶賀表現をこめ、瞿麦にも単なる景観の美以外にこめるものがある。格式ばったというか、入道一品内親王歌合、の意識が溢れている。主人の人柄によるものではあるまいか。

修子は延子を弟後朱雀帝の後宮に納れる希望をもって見事な貴婦人にと養育した註(Y)のであったが、あの華やかなサロンの主・姪嫄子が24歳で他界するという無惨さに、ためろうたのではあるまいか。教道は、「宮の御事の程なきに」（嫄子中宮の死）と兄頼通の不興を無視して、十二月生子を入内させたが、修子は翌長久元年正月庚申歌合、長久二年夏、歌合を催し、漸く三年後、長久三年三月、養女延子（伊周孫）を入内させた。47歳。延子は十月女御となる。中関白一門の復興を、修子は念じていたと思われる。身は一條院第一皇女――母は皇后定子、後一條帝も後朱雀帝もわが弟、という気位が修子にあったようである。しかし延子に男皇子は生れず、この夢は達せられなかった。女ばなれのした道心深い生活という修子にしては、延子の入内にかけた執心が、中関白一門意識と無関係には思えないのである。

その後は佛道一途で、歌合も催さなかったのではあるまいか。

(四)　麗景殿女御延子歌合　永承五年一〇五〇

四月廿六日　延子35歳　正子六歳

藤頼宗・伊周女の間に出生した延子は、一品修子内親王の養女となり、その愛育をうけた。註(Y)7歳著袴、9歳で修子（29歳）出家。その希望で長久三年三月、後朱雀の後宮に入り、十月女御となる。修子47歳。永承四年二月七日、修子52歳で他界。翌五年四月に、延子は、後朱雀崩後出生の正子内親王と共に身を寄せていた実父頼宗邸で、歌絵合を催している。その序によれば、（平安朝歌合大成三932頁～934頁による）

一三九　永承五年四月廿六日前麗景殿女御延子歌絵合

（天保八年刊本・校異静嘉堂文庫蔵本以下略）

麗景殿女御歌合　絵合永承五年

三月の十日あまりの夕暮に、月影御簾にうつるをりしも、人(イ)あまた侍ひて、物語りのついでに、誰とはなく云ひあはせし、「春の日の徒然に暮らすよりは、つねならぬ挑みごとを御前に御覧ぜさせばや。昔より聞こゆる花合などは、散りて古き根にかかりぬれば、匂ひ恋しく、草合とかは、尋ねてもとのところに返しやれば、名残り煩さし。さて憶良(ハ)が歌林とかいふなるより、古万葉集(ニ)までは心も及ばず。古今後撰(ホ)こそ、青柳の糸繰り返しみれども飽かず。紅葉の錦染め出だす心深き色なれ。」とて、左右に定めつ。「歌絵(ヘ)にかくは世の常のことなれば、題よみ人をかくべきなり。詞を採れば歌はかきにくく、歌を選るには詞あらはれず。神の心には愛でらるとも、人の謗りをば逃れがたし、古への歌の深きにそへても、新しき言の浅くともあらむは珍らしくや。」とて、歌三つをそへたり。鶴・卯花・月。郭公こそあるべきほどなれど、大殿の歌合の題なれば、鶴に代へたるなり。女房廿人を十人づつ取り分けて、書く人を伝手伝手に尋ぬるほどに、四月のなかばにもなりぬれば、葵の盛りにひきかかりて、諸人いとまなき頃を過ごして、廿六日に、空のけしき曇りなきに、寝殿の東面の身屋・廂を上達部の御座にしたり。源大納言殿(ト)・小野宮の中納言・左衛門督・新中納言・中宮権大夫・右大弁・左大弁・三位侍従。殿上人は競馬の定めしける日なれば、そのところより右の頭の中将つぎつぎ八九人許ひき連れて参り給へり。御簾のうちには北南居分きて、左瞿麦重ね、右藤重ね。左、かねの透筥に心葉して、かねの卯花重ねの紙敷きて、結袋に色色の玉を村濃につらぬきて括りにしたり。

(イ)古今絵七帖、あたらしき歌絵のかねの冊子一帖入れたり。表紙さまざまに飾りたり。打敷瞿麦の浮線綾に、卯花を繡ひたり。員指かねの州浜に指出の磯をつくりて、岩山に松おほく植ゑたるを、員には浜辺に刺し移すべきなり。打敷深緑の浮線綾なり。右、鏡の海にかねの網を浮べて、玉の錨にかねの綱をかけたり。かねの透筥をうちに置きて、絵の冊子六帖あたらしき歌絵の冊子一帖入れたり。表紙さまざまに飾りたり。打敷二藍の象眼に白き文を繡ひたり。員指、かねの洲浜にかねの鶴あまた立てり。千歳つもれるといふ心なり。員には鶴の浦づたひすべきなり。打敷深緑の象眼に繡ひものしたり。日もやうやう暮れぬれば、こなたかなたに居分き給ふ。大殿はつつませ給ふ御姿なれど、上臈ものし給ふとて、しのびあへさせ給はず。左歌読む人、四位少将。右兵衛佐。方方の冊子とりて、読み合はせするほどに、前年二月に一品修子内親王（延子養母）、七月に頼宗生母明子他界。服喪中で大殿はつつませ給ふ御姿」であるが、実際の経営者と思われる。

(ロ)女房達が誰いうとなく延子の徒然の慰めにと思い立った。

(ハ)「常ならぬ挑み事」――（平凡な花合・草合ではなく）――を企画

(ニ)憶良類聚歌林・万葉集までは心及ばぬ。

(ホ)古今集・後撰集あたりを対象にした歌絵合

(ヘ)歌絵だけでは平凡。これに「題」鶴（時季からは郭公とあるべきところだが、大殿の邸という場所柄高貴でめでたい鶴にした）卯花・月を設け、古歌の歌絵に新歌三首づつの歌絵を添える。

女房廿人左右にわける。

読人　相模　伊勢大輔・加賀左衛門

(2) 男性念人として、褄子内親王の家司源大納言師房、祐子内親王の家司藤中納言資平以下隆國、俊家……らが控え、頼宗も顔を出す。

(3) 左は古今集の歌を歌絵にかいた七帖

新歌　鶴、相模、卯花、相模、月、相模、

右は古歌（後撰集か）を歌絵にかいた六帖

新歌　鶴、伊勢大輔、卯花、伊勢大輔、月、加賀左衛門、

延子の女房としては、養母修子の女房相模一人で、左方三番を一人で務め、この歌合を取りしきったと思われる。他からベテランの上東門院の伊勢大輔、六条斎院の加賀左衛門を招く等、相模と共に、褄子の家司源師房が実際の差配をしたものではあるまいか。長久二年二月生子歌合には、伊勢大輔、相模は一坐し、仝四月七日、31歳の師房邸歌合に、上東門院の五節、小弁、加賀左衛門らが又、仝二年夏修子歌合に相模、加賀左衛門、五節らが一坐しているから。一条院伝領の資産をもつ入道一品宮修子の養女延子は、養母の財を気儘に費って、師房、相模らに委せて、此の甚だ華やかな歌絵合を催したが、この後はさしたる活動もしなかったようである。その後相模は、祐子、内裏（修子の甥後冷泉帝）、天喜四年皇后寛子歌合にも出詠して活躍しているが。

(五)　祐子内親王歌合

長暦二年四月出生。母中宮嫄子は、その十月十六日菊合を催している。翌年、妹褄子出生後、母后が他界し、褄子共共、頼通夫妻に愛育される。〇翌長久二年五月十二日庚申の夜、4歳の祐子の為に歌合が開催される。外祖父頼通の後援で、家司資房、乳母らが、一には幼内親王を慰める為、二には、早々と、内親王教育の一環として計画した、なかなか凝った名所歌合で、派手な遊びの中に物の名――（地名、動植物名、行事名等々）を、幼児に覚えさすには恰好の教材で、甚だ教育的である。

（平安朝歌合大成三865 866頁により作製の表）

一番　松　祝　（右）武河松（高砂松）　（左）（竹川・武河）播磨国　伊勢国（甲斐国）

二番　浦　（　）　（右）名古浦　明石浦　越中国　播磨国

三番　山　郭公　（右）小暗山　音葉山（音羽山）　（左）小倉山（小山田郷）　山城国　山城国

四番　卿　早苗　（右）勝間田郷　武蔵国　大和国　苗代

五番　河　蛍　（右）名取川　染川　（左）睦前国　筑前国　いさり火　雁の水掻き・下枯

六番　江　芦　（右）筑摩江　三嶋江　（左）近江国　摂津国

七番　（　）（　）

八番　森　蟬　（右）ゆるぎの森（磐瀬）　（左）（万木）よろぎ　近江国　いはせの森　大和国　村雨

九番　野　照射　（右）武蔵野　印南野　（左）武蔵国　播磨国　鹿のたちど

十番　関　（右）洲間関（会坂関）　（左）須磨関（逢坂関）　摂津国　近江国

つまり、歌合を通じて右表の事項が4歳の祐子の耳に教えこまれたのである。

〇永承五年六月五日　賀陽院一宮歌合13歳

関白頼通の加陽院第において、関白の指図によって祐子内親王歌合が催された。男女各六人、兼題「桜　郭公　鹿」が与えられていた。

左方女方は典侍（大弐三位）　侍従（江侍従）　伊勢大輔　出羽弁　小弁　相模　右方男方は資業　兼房　家経　範永　経衡　能国法師と何れも錚々たる歌人達である。これには、式部大輔資業の詳しい漢文日記が付いてい

る。既に13歳に成長した祐子の前で、歌人達の賑やかな論議が行われる。勝負褒貶之比、第十七番鹿歌持レ疑、反覆被レ定レ持了。其後、簾中有二驚レ耳微音一。相挑之心、中動外形歟。満座高声　乗レ興催レ感。関白頼通、右大臣も郭公の歌を詠んだ。殿下、抽二郭公題一、殊令レ詠二嘉什一。詞林花鮮、艶流泉清。講席之間、諷吟無レ止。嘉歎之余、右大臣、執而懐レ之。退出之比、曳二出竜蹄二足一。一足内大臣、一足右大臣。浮雲半レ漢、視者驚レ眼。自余上卿、達レ旦退出。興味不尽之故也と、歓をつくした歌合であった。頼通の期待どおり、祐子は歌の面白味がわかり、段々成長したであろう。

○永承六年五月十一日庚申祐子歌合14歳

五首が萩谷氏によって拾収されただけである。題は花橘、郭公、水鶏　瞿麦　等であったようである。歌人は少将、小侍従　小弁ら。

○康平三年四月廿六日　庚申祐子歌合23歳

五題五番（和歌合抄目録）

○康平四年三月十九日　祐子内親王名所歌合　24歳

「歌合大成四」1162頁の収集結果の一覧表を掲げさせていただく。

歌番号	部類	歌題	作者名		
1	春	霞の里	式部	一三五	
2	〃	〃			
3	〃	青柳の森			
4	〃	緑のの池	和泉	初出	
5	〃	〃	小侍従	一六三	
6	春	藤の森	小侍従	一三五	
7	夏	青山	美作	一三五	
8	〃	〃	〃		
9	〃	清水の池	美作		
10	秋	雲井の里	加賀（左衛門カ）	一二九	
11	〃	月の山	加賀		
12	〃	〃	大進	初出	
13	〃	露島	少将	一二六	一三六
14	〃	秋の湊	紀伊	一六三	
15	〃	秋の湊	攝津	初出	
16	冬	氷川	禰式部（源式部カ）	一六三	
17	〃	氷川	紀伊		
18	祝	千年山			
19	〃	恋の松原	駿河	初出	
20	〃	恋の松原	甲斐	一六〇	
21	〃	逢はでの森	相模	一二三	

十五題十五番—春四　夏二　秋四　冬二　祝一　恋二—かと想像される。祐子内親王家女房を主軸に祺子内親王家・四條宮家その他の女房が参加した盛大な歌合のようである。特色は矢張り、名所歌合を又催した点である。しかも初回の名所歌合は四歳の幼内親王の教材提供も兼ねていたから、ポピュラーな歌枕・内親王が早晩記憶しなければならない地名、動植物名であったが、二十年後の今回は内親王すでに24歳、十分の教養を身につけているから、女房達は、甚だロマンティックな霞の里、青山、月の山、氷川、秋の湊、恋の松原、逢はでの森……といった地名、漠とした、何處ともしかとわ

からない、又、わかる必要もない地名を詠みこんで、娘ざかりの内親王と一緒に歌合を、しんから楽しんでいる風情である。何れにせよ、名所歌合は祐子サロンの特色である。

○某年秋祐子　草合

平安朝歌合大成の拾収された１２３４５歌をみると、続詞花集「高倉一宮の草合の勝熊のことし侍りける、姥捨山に月をのぞむ人ある所に」、夫木抄「祐子内親王家闘草歌合」で、草合歌合であると同時に、姥捨山、しかすがの渡　逢坂の関、瀬田の橋等、祐子歌合の特色たる名所歌合的性格も具えていたようである。

この後、歌合を催さなかったか。延久四年35歳出家、寛治元年隆姫他界後、高倉第を伝領。長治二年一一〇五十一月八日68歳で他界。24歳から68歳迄の四十数年間、祐子は、どう過ごしていたのであろうか。妹の禖子は承暦二年一〇七八十月迄、二十五度に及ぶ派手な歌合活動を展開しているのであるが。殊に晩年、此の禖子が姉に先立って他界した嘉保三年一〇九六以後の十年間は、心静かに看経に明け暮れたものであろうか。

(六)　六条斎院禖子サロン

禖子は、長暦三年八月十九日出生、仝廿九日母中宮嫄子他界。生後百日十二月五日内親王に補せられた。姉祐子内親王と共に外祖父頼通、隆姫夫妻に愛育される。長久元年十二月廿二日正二位大納言春宮大夫源師房が家司に、廿三日に資房が一品祐子内親王の家司になる。（春記）師房は具平親王男。頼通の妻隆姫の弟で、頼通の猶子となった人物。自身も歌合を屢々催す等、頼通一派の「過差」好み、歌合好きである。堅実な資房――（前掲のように頼通、師房らに批判的であった）――が家司であった祐子内親王家と、師房が家司の禖子内親王家とに、自然・大きな差違が生じてきた。祐子歌合五度、禖子歌合二十五度（平安朝歌合大成ニヨル）という大差は、もとより、内親王自身の資質、性格にもとずくところが大であろうが、実際に行事を設営し取りしきった家司師房の才幹、志向、その薫陶によって、幼内親王の才質が助長されたとみるべきであろう。

①［永承三――四年五月］六条斎院禖子歌合　10―11歳

六番題（夏）菖蒲　榊　夏山　忍草　恋　祝

と、普通の歌合である。

②永承四年十二月庚申夜　於本院・御神楽次行之歌合　11歳

題　神楽　雪　氷　歳暮　待春

と、前回をうけた形で、今回から、宮の君11歳の詠が入ってくるのである。「幼くおはしませど、歌をめでたく詠ませ給ふ」と評するように、大人の歌人にひけをとらぬ。廿巻本によれば、待春左かっで、女主人に花をもたせた贔屓の判定とは言えぬ出来である。

十一歳から、錚々たる歌人女房の中に入って歌を詠むこと九回十四首である。後述のように当時の一流歌人といってよろしかろう。

③永承五年二月三日庚申　歌合　12歳

十二番題春　霞・鶯・梅　春日祭　稲荷詣　柳　桜　雁　苗代

月　祝　恋

④仝年　五月五日　歌合　12歳

三番題　菖蒲

⑤永承六年正月八日庚申歌合　13歳
　廿一番題　滝の音に春を知る　雨の中の柳　霞隔つる月
⑥永承六年夏歌合　13歳
　番題　夏日　夜月　鵜川
⑦天喜元年　歌合（逸）　15歳
　八番題　比々名
⑧天喜三年五月三日　物語合　17歳
　九番題　物語
⑨天喜四年閏三月歌合　18歳
　十二番題　閏三月　尋桜　山吹　菫　岩躑躅　藤　若草
　雉子　春駒　蛙　苗代　帰雁　暮の春
⑩［天喜四年五月］歌合　18歳
　六番題　五月雨あまりあり
⑪［天喜四年七月］歌合　18歳
　番題　六月祓　立秋　夜虫鳴初　七夕　祝　恋
⑫［天喜五年五月］歌合　19歳
　番題夏　遠聞郭公　草蛍似露
⑬天喜五年八月歌合　19歳
　十五番題　鈴虫　松虫　蛬　機織女　轡虫　雁　千鳥
　小鷹狩　鳴　鹿　月　駒迎　霧　秋田　衣擣
⑭［天喜五年］九月十三日歌合　19歳
　五番題　十三夜
⑮某年七月　歌合
　十番題　秋立
⑯康平七年十二月廿九日庚申歌合　26歳
　十番題　歳暮　立秋日
⑰某年三月十余日　歌合
　四番題　桜　柳
⑱某年春庚申　歌合
　十番題　春夜月　帰雁　蛙　呉竹　早蕨　菫　躑躅
⑲某年五月五日歌合
　十二番題　菖蒲　郭公　五月雨　橘　卯花　桙　早苗　照射　蛍
　水鶏　夏草　蚊遣火
⑳治暦二年九月九日庚申歌合　28歳
　五番題　菊
㉑治暦四年十二廿月二日庚申歌合　30歳
　十番題　月光似水　雪埋松　夜霰寤夢　炭釜煙高　仏名
㉒某年夏　歌合
　九番題　郭公暁声　同晝声　同暮声　夜中声　小鷹狩　擣衣　露
　雁　霧
㉓延久二年正月廿八日庚申歌合　32歳
　十番題　家梅始開　池氷一倍残
㉔承暦二年十月十九日庚申　歌合　40歳
　十番題　網代　嵐
㉕某年［二月］　禖子内親王男女房歌合
　九番題　稲荷詣　花未遍　春夜
　二十五度の歌合中、出詠頻度一覧
19度　美作　式部　出羽弁　左衛門

18　小馬　中務
16　宣旨
15　武蔵
14　讃岐
10　丹後
9　宮殿
6　兵衛
5　小式部
4　出雲　下野　播磨　大和
3　小弁　遠江　甲斐
2　別当
1　相模　越後弁　道雅女　家綱妹　宮少将　小将君　小納言
小左門

美作・式部・出羽は第一回から、左衛門は第二回から、つまり、永承三・四年一〇四八　一〇四九から、承暦二年一〇七八に及ぶ三十年間、袿子内親王歌合に出席した常連で、サロン活動を盛りあげた袿子取り巻きの歌人女房群団である。11歳から40歳迄、袿子を育てあげたこととなる。

さて、歌題であるが、前掲のように、広汎な領域の歌題を詠む。

植物…早蕨・梅・松・桜・岩躑躅・菊・柳・菫・呉竹・若草・藤・橘・忍草・卯花・山吹・早苗・夏草・菖蒲・楝・榊

虫…鈴虫・松虫・機織女・轡虫・蛬・蛍・蛙・夜虫鳴初

鳥…千鳥・雁・鶯・郭公・暁声・同昼声・同暮声・同夜中声・雉子・鵜川・鳴・水鶏

獣…鹿・春駒・駒迎

雪・氷・霰・霧・五月雨・霞・露・嵐・霧・月

月・夏日・夜月・鵜川・十三夜・夏山・蚊遣火・照射・苗代・秋田・持衣

A類　神楽　春駒　駒迎　小鷹狩　春日祭　稲荷詣　雛　七夕　仏名　網代　立秋　歳暮　春夜

恋・祝・物語

B類　待春・春未遍・滝の音に春を知る・霞陽つる月・雨の中の柳　月光似水・夜霰寤夢　炭釜煙高　池氷一倍残・家梅始開　草蛍似露　夜中鳴初

殊に郭公は、暁声、昼声、暮声、夜中声、遠聞郭公と芸がこまかい。

A類　の人間と自然とのかかわりの美

B類　題そのものに既に或る雰囲気をこめるもの等々、袿子歌合の繊細緻密な審美眼がうかがわれるのである。規子内親王前裁合の芸薄・女郎花・芸紫苑・荻・瞿麦・紫蘭・又、霜・紅葉がみえないぐらいである。

さて、特筆すべき「物語」についてみよう。

物語合　天喜三年

○栄華物語　巻第三十七（けぶりの後）（松村氏栄華物語全注釈）

先代をば後朱雀院とぞ申すめる。その院の高倉殿の女四宮（袿子）をこ（後系雀）そは斎院とは申すめれ。をさなくおはしませど、歌をめでたく詠ませ給ふ。候ふ人人も、題を出し歌合をし、朝夕に心をやりて過ぐさせ給ふ。物語合とて、今新しく作りて、左右方わきて、廿人

合などせさせ給て、いとをかしかりけり。明暮御心地を悩ませ給て、果は御心もたがはせ給て、いと恐ろしき事をおぼし歎かせ給ふ。

○後拾遺和歌集巻十五雑一

六条前斎院に哥合あらむとしけるに、右に心よせありときき(一)て、小弁がもとにつかはしける　小式部

あらはれてうらみやせましかくれ沼のみぎはによせし波の心を

かへし　小弁

岸とほみただよふ波はなかぞらによるかたもなきなげきをぞせし

五月五日　六条前斎院にものがたりあはせし待りけるに、小弁おそくいだすとて、かたのひとびとこめてつぎの物がたりをいだし待りければ、宇治前の太政大臣かの小弁がものがたりは、みどころなどやあらむとて、こと物がたりをとどめてまち待りければ、いはがきぬまといふ物がたりをいだすとてよみ待りける

ひきすつる岩垣沼のあやめ草おもひしらずもけふにあふかな

右によれば、並々ならず力を入れた頼通主導型の物語合であった事が明瞭である。

(イ)新しく物語を作らせて、それを合わせた事。

(ロ)左右にわけて廿人の物語合であった事

(ハ)褄子が脳病であった・病身で頼通らが心痛していた事

(ニ)小弁が、自作の「岩垣沼」を出すのが、時間がかかった事等がわかって興味津津である。現存の物語合では、

一　左　女別当

霞隔つる中務の宮

1九重にいとど霞は隔てつつ山のふもとは春めきにけり

右　宣旨

玉藻に遊ぶ権大納言

2有明の月まつ里はありやとてうきても空に出でにけるかな

二　左　大和

菖蒲かたひく権少将

3かけてのみ夜をしのぶる諸蘰あふひをみても花はわすれじ

右　宮少将

よそふる恋の一巻

4折らせなむ春の深山の桜花雲ゐにみればしづ心なし

三　左　中務

浪いづかたにと歎く大将

5ありはてぬ宿の桜の花をみて惜しむ心のほどはしらなむ

右　左門

あやめもしらぬ大将

6あやめ草玉の台のつまなれどなどかこひぢに生ひはじめけむ

四　左　少将君

打つ墨縄の大将

7我れながらいかに惑へる心ぞと契り結ぶの神にとはばや

右　甲斐

淀の沢水

8賤の男の淀野なりけるあやめ草大宮人のつまと頼むる

五　左　出羽弁

あらば逢う夜のと歎く民部卿

9つねよりも濡れそふ袖は時鳥なきわたるねのかかるなりけり

右　讃岐

菖蒲うらやむ中納言

10あやめぐさなべてのつまとみるよりは淀野に残る根をたづねばや

六　左　宮の小弁

岩垣沼の中将

11ほととぎす花橘のかばかりもいま一声はいつかきくべき

右　武蔵

浦風に紛ふ琴の声

12春の日に磨く鏡のくもらねばいはで千歳の影をこそみめ

七　左　出雲

浪越す磯の侍従

13君もゆき花もとまらぬ山里に霞む空をやひとり眺めむ

右　少納言

蓬の垣根

14見し人も荒れ果てぬめる故里に霞のみこそたちかはりけれ

八　左　小式部

逢坂越えぬ権中納言

15君が代の長きためしにあやめ草千尋にあまる根をぞひきつる

右　式部

なにぞ心にと歎く男君

12昔にもあらず淋しき山里にもろともにすむ秋の夜の月

九　左　小左門

をかの山たづぬる民部卿

17眺むるにもの思ふことは慰まで心細さのまさる月かな

右　小馬

云はぬに人の

18あやめ草人知れぬには茂れどもいつか見すべき浅からぬ根を

となっている。これは

廿人十番の予定であったものが、二人未提出の結果かと思う。その一人は、或は宮か。いまだ17歳、斎院という環境からいっても恋愛の経験も、あるいは無かったろうし、歌物語即恋愛物語の制作は、苦手だったろう。うっかり、作ってみようとは思ったが、テーマを思いつかなかったのではないか、と思う。も一人は、美作あたりか。美作は禖子歌合に19回・37首という最多数出詠の歌人で、翌天喜四年三月の禖子歌合では一番左・二番右・八番左と3首最多詠んでいるから、物語合に出ていない方が不自然である。純歌人で物語は不得手であったので、宮と一緒にダウンしたものかと想像する。

修子の養女延子女御歌絵合に参画した師房の意向なども、大いに此の画期的な大行事、物語合の企画に影響していると思う。修子の

手許には、母皇后定子サロンの所産ともいうべき清小納言の『枕草子』があり、その養女延子にも、女房らにも読よれていたと思われる。

定子皇后サロンは、単純な歌合で満足するていのものではなかった。文芸―（歌・物語）―はもとより、文化全般、人の心情・自然の景物、いわば宇宙の凡てが、そのサロンの話題にのぼった事は前述したところ。ことに物語評論に、宇津保の仲忠・涼優劣論に彼女達が熱中していたことに注目した。

定子サロンで、女房達が、定子に古今集のテストをされる條―（枕草子清涼殿丑寅の隅の）―で「…中にも古今あまた書き写しなどする人は……」というから、女房達の中で、字の上手な者は古今集や後撰、伊勢物語等々を書写する作業に従事したものと思われる。従って、定子のことであるから、女房に書写させた歌集や物語類が多く、恐らく白氏文集なども、それらが敦康親王、修子内親王の厨子棚に積まれていて、敦康、修子自身は勿論、女房達もそれらに親しんだものと思われる。乳母や故参の女房達はそれを教える家庭教師の役をも果たしたのであるから。

さて、前掲のように、定子サロンで、物語論議、宇津保物語仲忠、涼優劣論争、等が、賑やかにしばしば行われた事は、それらの物語をメムバーの女房読が熟読していた事を前提とする。枕草子「物語」の條で、

「住吉、宇津保、とのうつり、國譲り、月待つ女、片野の少将、梅壺の大将、理木、道心すすむる松か枝、狗野・遠君・芹河・かはほりの宮　落窪　物羨みの中将　人め」について、清少納言が論評している事は前述した。つまり、この物語愛好・礼讃の態度、雰囲気が、その伝来の物語類、歌集類と共に、修子、延子、嫄子、祐子、禖子サロンに伝わった、と筆者はみなすのである。延子サロンで、歌絵合を計画したのは、それのなせる結果である。専ら佛道に心を入れた修子とその養女延子のサロンでは、歌絵合どまりであったが、禖子サロンでは、禖子に十分の才能があった上に、そこに集う才媛女房群がいた。曾祖母伝来の物語類、歌集類、その後、頼通、師房らによって蒐集されたであろう数多くの物語類に育まれた禖子17歳、高名な曾祖母皇后定子サロンの日常を彷佛と描く『枕草子』の條條を読んで、かねぐ〜憧れていたであろう。修子サロンの相模も加わった。播磨・出雲・武蔵・美作・別当・式部・出羽・小式部・小弁・宣旨・讃岐・大和・左衛門・小馬・中務ら、何れも一騎当千のベテラン揃いであって、しばしば物語合をくりかえし、定子サロン張りの物語論議に花を咲かせる中、その類の物語を創作していた女房も当然いたとおもわれる。それで、極めて自然に、新しく物語を作り出して、物語合をせん、という事態に進行していったものであろう。「左右方わきて廿人合」というから、当サロンに廿人の作者がいる、と思えたのである。大した自負心ではあるまいか。命令一下、書き下しの短篇小説を、廿人の人々が一斉に、さっと作って持ち寄り、その作中人物の歌（原則として）で歌合をする、その物語の内容はもとより、装丁、料紙、筆跡の美にいたる迄、競われる、まさに、前代未聞の綜合芸術の競技である。その中の一篇が、今日も残存する「逢坂越えぬ権中納言」である。世界に比類のないサロンであった。しかも、十一世紀に、である。

楳子の歌

11歳②　春待つ　左かつ　宮の君
十番17〇谷ふかくすむ鶯もわがごとや心にかけて春を待つらむ
右　大和
18 咲けばかつ散る歎きせし花により心つくしの春を待つかな
12歳③　苗代　左　宮殿
十二番17〇昨日までかへる山田とみしほどに苗代水は影澄みにけり
右かつ　小馬
18 小山田の賤の男どもはいつしかとまづ苗代のいそぎをぞする
12歳④　菖蒲　左　宮殿
三番15〇下り立ちてあまりひけれど菖蒲草かくばかりなる根だになきかな
右　小馬
6 あやめぐさ長き根にこそ沼水の底の心のほどは知らるれ
廿一番三首13歳⑤　瀧の音に春を知る　左かつ左衛門
ふりつみし雪はみえねど吉野山滝の音にぞ春は知りける
右　宮殿
〇2ほどもなく春を知るかな山川の岩間をくぐる瀧のひびきに
雨中柳・　左かつ　左門
15 みどりなる玉を貫けるとみゆるかな柳の枝にかかる春雨
右　宮殿
〇16 ふるごとに色や染むらむ春雨の柳の糸の深みどりなる
霞隔てる月　左　左門
29天の原かすみこむれど春の花の月の影には似るものぞなき
右かつ　宮殿
〇30曇りなくみるだにあかぬ月影をおぼろなるまで霞む空かな
18歳⑩　五月雨あまりあり　左かつ　宮殿
〇1五月雨のひさしき年のしるしには軒の菖蒲をひきやそふべきむ
右　武蔵
2 五月雨の数もまさればあやめ草ひきかへしてやつまにかくら
十二番二首19歳⑫　遠聞郭公　左　宮殿
〇3待ちあかす宿にはなかで時鳥くもゐながらもすぎぬなるかな
右から丹後
4時鳥はるかに声ぞきこゆなるたが里ちかくなきてゆくらむ
草蛍似露　左　宮殿
〇21もろともにおき明かすかな夜な夜なを草の蛍の露と見えつつ
右かつ　讃岐
22 庭の面に草の蛍の飛び交ふをいとど置き添ふ露かとぞ見る
五番19歳⑭　九月十三夜　左　宮殿
〇1こよひしもなどか光のまさるらむ出で添ふ月はあらじとおもふに
右　宣旨
2あらたまる月の色さへくもらねばなほ身にしむは秋の空かな
二首30歳㉑　月光似氷
一番左　出羽
1 天の原みなそこかけて照らすかな池の氷にやどる月影
右　宮殿

○[2]　ふゆの夜の氷にやどる月みれば光もさゆる心ちこそすれ

二番　　左　　美作

[3]みる人の身さへぞしむる池水のこほりの上にすめる夜の　月

右　　宮殿

○[4]こほるとも宿れる月のみがかずば池の鏡は暗うやあらまし

二首40歳㉔　網代

一番　　左　　宮殿

○[1]氷魚のよる網代にかかる白波は水にふりつむ雪かとぞみる

右　　武蔵

[2]ひまもなく網代に氷魚のよる時はしきりに波のたつかとぞみる

六番　嵐　　左　　宮殿

○[11]冬かよふ人もまれなる山べには嵐ばかりぞ絶えずおとなふ

右　　武蔵

[12]うちとけてねられざりけり神無月夜半の嵐におどろかれつつ

二五度の歌合に、九度、14首出詠している。

第一回目②は十番の中、九番左方かつ、第二回目③は十二番中、九番左方、第三回目④は、三番の果の左方である。

13歳の第四回目⑤は、三首出詠。廿一番中、一番右方、八番右方十五番右方かっである。サロンの女主人公らしく、一番をよむ。ただし、右方。二首は負け、三首目は勝。

13歳夏⑥から15歳⑦、17歳⑧、18歳三月⑨迄、出詠していない。あるいは、二〇歳斎院退下の原因となった例の病脳の故かもしれない。ただし、天延三年物語合は新しく物語を制作してその作中人物詠（原則として）で歌合をするという超高度の歌合で17歳の内親王の手には負えなかったものと思われる。

18歳の第五回目⑩は、六番中、一番左かっである。本格的に一番左方でしかも勝、右方は手練の武蔵である。「五月雨あまりあり」の題で、五月雨のひさしき、と久しき年とを懸けて、祝の意もこめる。一番左らしい貫禄である。18歳とは、お見事と申す外はない。この時は快調の時期と思われる。

19歳五月は⑫、十二番中、二番左、十一番左、共に負。しかし、「待ちあかす」も「もろともに」も素直ないい歌である。流石に右方の丹後、讃岐の手練に及ばなかった。

19歳九月は⑭、五番中、一番左である。「秋の月を歌題にした歌合は枚挙に遑ないが、九月十三夜の月を歌題にしたものは、他に類例をみない。ここにも歌合に関する主催者の見識を見ることが出来る」と、平安朝歌合大成巻四、一二二頁「史的評価」の中で、萩谷氏が高く評価するところである。

ところが、翌康保元年、20歳・病脳の為に斎院を退下。以後、某年七⑮月の歌合。

26歳康平七年十二月⑯の歌合

某年　三月⑰の歌合

某年　春⑱　の歌合　　出詠せず。病脳によるか。

某年　五月⑲の歌合

28歳治暦二年九月九日⑳の歌合

30歳㉑治暦四年十二月廿二日庚申歌合　十番

一番右方二番右方、二首出詠している。「ふゆの夜の」は褄子らし

い素直な詠み口である。「こほるとも宿れる月のみがかずば池の鏡は暗うやあらまし」は、珍しく一ひねりして、理屈っぽい歌となっている。病脳おさまりていたか。

某年　夏㉒　九番　出詠せず。

32歳㉓延久二年正月廿八日庚申歌合、十番。出詠せず。

31歳32歳にかけては病は小康をえていたか。その後、病脳と、

36歳康保元年　関白頼通83歳　他界

39歳承保元年　家司源師房　他界

後援者を亡くし、歌合は催さなかったか。

40歳㉔　承暦二年十月廿九日庚申歌合　十番　を催す。

「網代」一番左方、「嵐」六番左方（嵐の題では初番）二首を詠んでいる。

「氷魚のよる網代にかかる白波は水にふりつむ雪かとぞみる」は、華やかで美しい景を描出した。「冬かよふ人もまれなる山べには嵐ばかりぞ絶えずおとなふ」も、寂しい境遇にあって、実感の投影かと想像される。共に秀詠といえよう。禖子健在の感をいだかせるのである。

某年二月　男女房歌合　出詠せず

40歳承暦二年十一月以後、永長元年（一〇九六年）58歳他界迄十八年間は、あまり体調もはかばかしくなかったものか、歌合活動もなかったようである。この後、姉祐子内親王は68才で嘉水元年（一一〇六年）他界したが、祐子のサロン活動は、すでに康平四年（一〇六一）で終わっていた。定子皇后の系統をくむ六條斎院禖子の華麗なサロン活動は、承暦二年（一〇七八）十月廿九日庚申歌合をもって終るから、十一世紀も亦、定子皇后曽孫の禖子サロンの終焉をもって閉幕というべきであろう。